

幕末から明治期にかけて活躍した鍍絵師・入江長八(1815~1889)の名は伊豆長八の方が知られている。伊豆長八の名前の方が一般的になった理由は結城素明著『伊豆長八』(芸艸堂、昭和13年、同復刻・昭和55年)によって彼の作品が知られるようになったからである。『伊豆長八』では、長八の生涯と作品についてほぼ網羅的に紹介しており、今日においてもその価値は評価される。その後、白鳥金次郎『名工伊豆長八傳』(伊豆長八傳刊行会、昭和33年)も詳しく長八作品を調査した成果をまとめている。また、長八作品を図版で紹介している『長八作品集 上・下』(松崎町振興公社、平成元年10月20日)なども刊行されている。

さらに近年、刊行された村山道宣編『土の絵師 伊豆長八の世界』(木蓮社、平成14年11月6日発行)は多数の執筆者の論考を集めており、それぞれの人たちの長八作品に対する思いを知ることができて貴重である。また、これまであまり知られていなかった南伊豆町などの長八作品も紹介されていて新たな作品の発掘にもなっている。

鍍絵は土壁に鍍で描いた絵画ということで壁画との類似性も考えられるが、長八の鍍絵は制作技法が多彩で作品も建築装飾、塑像、塗額(額装の鍍絵)など幅広く、幕末から明治にかけて生まれた新しいジャンルの作品と考える方が妥当である。

長八は伊豆・松崎の出身で若くして伝統的な狩野派の絵師の下で絵画技法を学んだと言われる通り本格的な絵画作品を残す一方、鍍を駆使した建築装飾、塗額、塑像などを制作しており、その遺品は多彩で他の鍍絵作家の作品とは一線を画する作家であった。これは画家と左官職人という二つの側面を有する作家であったからこそでき得る成果である。

江戸から明治という大きな社会の変革期において長八の作品も建築装飾の鍍絵から塗額や塑像作品へと変化している。この明治初期の活動には第1回内国勸業博覧会(明治10年)への出品があるが、その出品物を見ると塗額から火鉢など多彩である。

明治期の長八の活動で特に注目できる点は幕臣・政治家で剣・禅・書の達人である山岡鉄舟、侠客・清水次郎長さらには三島・龍澤寺の住職星定老師との交流が注目される。この交流の成果としては写真をもとにして制作した清水次郎長の肖像画、龍澤寺隠寮の障壁画群、仏像などがある。

また、漣を表現した壁の一部を屏風仕立てにした作品、沼津・戸田の松城邸の擬窓、掛軸を模した鍍絵、大理石の肌合いを表現した漆喰に文字を刻した扁額、塗額の縁を竹に摸した塗額など長八の多彩な技術を見ることができる。

今回の発表はこれら多彩な長八作品を紹介するとともに日本画家、左官職人としての素養がどのように生涯に渡って変遷していったか展望するとともに時代との関わりを考察したい。